

『狂歌百物語』に見る平家蟹： 蟹に化した人間たち（3）

蛸 島 直

はじめに

前々稿「蟹に化した人間たち（1）」[蛸島 2012]、および前稿「蟹に化した人間たち（2）」[蛸島 2013]では、平家蟹をはじめ、人間が再生・化生したとの伝承を伴う「へいけがに」「おさだかに」「おにがに」「きめんがに」「きよつねがに」「しまむらがに」「たけぶんがに」等の蟹について、20の国語辞典の記載、そして古文献における記載を概観してきた。それらの多くは、上記の蟹の名称をみな同種であるとする姿勢、すなわち同物異名（synonym）説を提示しているが、筆者は、そこに疑問を禁じ得ず、むしろ同名異物（homonym）も存在しうると考えている。

なお、前稿においては、建部綾足の『折々草』における興味深い記載に注目し、かなりの紙幅を割くことになった。1750年代の赤間関（下関）の平家蟹の標本には赤白2種類があり、前者は怒った顔を示し、後者はおだやかな顔をしているという。筆者はそれぞれがキメンガニとヘイケガニであろうと予想したが、綾足は、前者が赤いのは酒で炊いたからだという現地の説明を伝えていた。ところが、酒井恒氏は「実際のへいけがにの色は暗紫色でゆでも赤くはならない」と記しており、綾足の記述が疑問視されることとなった。前稿脱稿後の2013年6月8日、下関市立しものせき水族館の土井啓行氏のご紹介により日本海甲殻類研究会第12回発表会において「長田蟹・武文蟹・島村蟹はヘイケガニか？」と題して報告の機会を与えていただいた。その場で、先の矛盾を指摘したが、その直後の6月14日、土井氏が、死亡したヘイケガニの個体を淡水で煮沸実験された結果、赤変したとのこと。写真添付のうえご報告をいただいた。驚くべき結果であった。その後、土井氏は、筆者自身が実験できるようご配慮され、キメンガニとヘイケガニを送付して下さいました。7月2日から4日にかけてそれぞれを淡水と酒で煮沸したところ、どちらも赤変することを確認した。この結果については、機会を改めて土井氏とともに報告したいと考える。

さて、前稿は、新宮涼庭による1813年の記録『西遊日記』の紹介と検討、そして小

括をもって擱筆した。そこでは、ヘイケガニばかりでなくワタリガニも「平家蟹」と呼ばれていた可能性、また錦絵においてはベンケイガニ科の蟹もヘイケガニのモデルとなっていたこと、島村蟹に関してはまさにワタリガニがモデルとなっていたことを指摘した。本稿では、引き続き、『西遊日記』と同年の下関の記録を記す『日本九峰修行日記』の紹介から開始し、後半において『狂歌百物語』を取り上げようと準備を進めていた。しかし、『狂歌百物語』は、これまでの本草書や地誌・紀行文の類いとはジャンルを全く異にするもので、かつ、同書における平家蟹をめぐる狂歌45首が伝えてくれる情報は非常に豊かである。当然に、その紹介と考察はかなりの紙幅を要することとなり、本稿では、年代順という口約に反することになるが、『狂歌百物語』に限定して、そこに所収される平家蟹をめぐる狂歌に注目することにしたい。これらの狂歌は、当時の平家蟹像が実に豊かな多様性をもっていただことを教えてくれる。また、それらのモデルとなったであろう蟹は、ヘイケガニとは限らず、ワタリガニ、アカテガニ、スナガニの仲間など多くの蟹の姿が想起されるのである。

以下、『狂歌百物語』について簡単な説明を行い、狂歌45首を列挙し、そこに詠まれた地名や人名、蟹の諸特徴や栖息場所等について考察しながら、平家蟹像のモデルについて検討してみたい。

1 狂歌百物語

『狂歌百物語』は、嘉永6年(1853)に天明老人^{じんごろうたくみ}盡語樓内匠の撰により刊行された狂歌絵本である。全8編から成り、百には及ばないが96名称の妖怪や奇怪な生物を主題とした狂歌を収集し、それぞれに竜閑斎(竜斎閑人正澄)による彩色の挿絵が添えられている。各編12の怪異を取めているが、「平家蟹」はその初編、「見越入道」「狐火」「船幽霊」に続く4番目の歌題となっている。まずはこのこと自体に注目しておくべきであろう。すなわち、平家蟹は、それだけ知名度も高く、話題に取り上げられることも多かったであろうことが確認されよう。

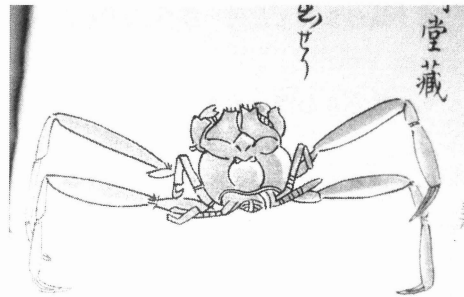
小泉八雲(ラフカディオ・ハーン)は、「平家蟹」を取めた『骨董』を上梓した翌1903年に『狂歌百物語』を入手し、興味をもった歌を英訳し解説を行っていたが、未発表のうちに翌年他界している。ハーンはこの原稿を Japanese Goblin Poetry (化けものの歌)と呼び、1905年に他の遺稿とともに米国で The Romance of the Milkyway & Other Studies & Stories の一書として刊行されている [小泉一雄 2002 (1934): 3]。そこには14の怪異に関する48首の狂歌、平家蟹を詠んだ歌4首が紹介され、丁寧な解説が付されている。同書は後に平井呈一によって『天の川綺譚』として翻訳され、全訳作品集に収められている [小泉八雲・平井 1964]。また、ハーン没後30年の1934年には、子息小泉一雄氏の編集により遺品の中から妖怪に関する狂歌と戯画を纏めて『小泉八雲手稿畫本 妖魔詩話』(Japanese Goblin Poetry)が上梓されたが、そこでは平家蟹を詠んだ狂

歌が、2首追加されて6首掲載され、一雄氏による示唆に富む解説が補足されている [小泉一雄 2002 (1934) : 20-23]。

さて、『狂歌百物語』には平家蟹を詠んだ狂歌45首が収められている。竜閑斎による挿絵には、磯岩の見える波打ち際の砂上を這う、赤みを帯びた3尾の蟹の姿が描かれている〈写真1〉。甲羅の面には迫力があり、目尻の上がった目には腫までが描かれている。しかし、実際のヘイケガニ科の蟹の姿とはやや異なっている。この時代には、いくつもの文献に確認してきたように下関では土産物として平家蟹の標本が盛んに販売されていたのである。滝沢馬琴らが文政7年(1824)から翌文政8年(1825)にかけて開催した珍品鑑賞会には明らかにヘイケガニと思われる蟹が出展されていたことは『耽奇漫録』の挿絵〈写真2〉に確認できる [滝沢・日本随筆大成編集部編 1930 : 327]。天明老人や竜閑斎もヘイケガニの標本を実見していた、あるいは『耽奇漫録』の挿絵等を目にしていた可能性は高いと考えられる。しかし、『狂歌百物語』の挿絵は決して写実的なヘイケガニ像とはいえない。それは同書に収められた狂歌にもいえることで、狂歌師たちは絵師同様に、存分に想像の翼を広げていたようである。と同時に彼らはヘイケガニ以外の複数種の蟹たちに平家蟹のモデルを求めていた可能性がある。



〈写真1〉竜閑斎による平家蟹の挿絵
(京極夏彦・多田克己著・須永朝彦校訂『妖怪画本・狂歌百物語』国書刊行会)より



〈写真2〉『耽奇漫録』における平家蟹の挿絵
(滝沢馬琴・日本随筆大成編集部編『耽奇漫録』吉川弘文館より)

2 平家蟹をめぐる狂歌45首

『狂歌百物語』は、吉田幸一氏の編集と解説により古典文庫より1999年に上下2冊で活字化されている [吉田 1999a, b]。その後、古典文庫所蔵書を底本として京極夏彦・多田克己両氏編著・須永朝彦氏校訂により、『妖怪画本・狂歌百物語』が2008年に国書刊行会から刊行されるが、ここでは『狂歌百鬼夜興之図』が付録として収められている [京極・多田・須永 2008]。ここで同書に依拠し、『狂歌百物語』初編に記載される平家蟹をめぐる狂歌45首を引用してみよう。同書の表記のままに引用し、() 内に作者名を

示すとともに、掲載順に筆者（蛸島）が番号を付すことにしたい。

- 1：紅き毛の生えてぞ見ゆる平家蟹 おらんだ文字の横にあゆみて（宝珠亭船唄）
- 2：汐煙立てて飯炊く平家蟹 兵糧^{ひやうらうがた}方の武士^{ものふ}のはて（語安台有恒）
- 3：中々に岸に三つ四つ平家蟹 弁慶蟹をとりこにぞする（萬々歳箴丸）
- 4：平家蟹兜蟹とや挑みあふ 鍛^{しころびき}引せし昔しのびて（万丁庵柏木）
- 5：水鳥に今もおどろく平家蟹 逃げながら目を空ざまにして（於三坊菱持）
- 6：怨念^{ひよどりご}も 軻^こ越えや偲ぶらん 空ざまに目のつく平家蟹（大堀 花月楼）
- 7：緋^{はかま}の袴着し面影や室の津へ 身を沈めたる平家蟹らは（松廻門鶴子）
- 8：執^{しよ}ねきのまだ懲りやらぬ平家蟹 するどき鉄前立にして（花躬）
- 9：味方みな押し潰されし平家蟹 遺恨を胸にはさみ持ちけり（金鏢）
- 10：鯛ひらめ中に交れど平家蟹 けして奢^{おご}りの座には出ぬなり（羽毛多楼比可留）
- 11：火の消えしごとにはあれど磯岩に 群れつつ飯を炊く平家蟹（駿府 東遊亭芝人）
- 12：奢りたる果こそ見ゆる平家蟹 烟も立てず飯や炊くらん（結城 椿園）
- 13：海^{うな}そこの海者とむつみて平家蟹 伊勢と呼ばれし武士のはて（金剛舎玉芳）
- 14：水鳥の羽音^{あわ}に沫を吹きたりし その怨念や蟹となりらん（青梅 千本）
- 15：政道も曲げる平家のしるしには 蟹に成りても横道を行く（角有）
- 16：戦ひに負けても敵に後ろをば 見せぬ平家の蟹の横這ひ（雛好）
- 17：欲深き海の底なる平家蟹 爪長くせし人の果てかも（静洲園）

『狂歌百物語』に見る平家蟹：蟹に化した人間たち（3）（蛸 島）

- 18：前の海後ろの山ゆ攻められて 霊も横ゆく蟹となりけん（駿府 若葉）
- 19：友盛〔知盛〕のなりし蟹とも見ゆるなり 鋏に持ちし長刀ほほつき（語智窓腹光）
- 20：まねきたる夕日の色の平家蟹 泡をふく腹〔福原〕の昔偲びつ（常陸村田 菊成）
- 21：石垣の穴にこまれる平家蟹 浪の寄せ手に泡や吹くらん（楳星）
- 22：奢りたるねぢけ平家の^{もののふ}武士は 横に道行く蟹となりけり（歌評子頓々）
- 23：壇の浦戦ふ波の^こ来しかたや 兵糧飯も炊く平家蟹（国吉）
- 24：負け^{いくさ}軍 無念と胸に挟みけん 顔も真赤になる平家蟹（青梅 衛門）
- 25：奢りたる昔を偲ぶ平家蟹 爪長くして横に歩めり（下毛葉鹿 花好）
- 26：一の谷八島は落ちし平家蟹、甲羅に似せし穴に住むらん（国吉）
- 27：戦ひの時しも横に逃げにけん 浜辺に泡を吹く平家蟹（年々齋米寿）
- 28：鋏をば前立にして平家蟹 備へも堅き石垣の穴（和木亭仲好）
- 29：一念が凝って背びらに^{つら}面の皮 敦（厚）盛までも蟹と成るらん（鈍々舎嘉勝）
- 30：平家蟹鋏の刃をも喰ひしめて 須磨と明石の浦見て（恨みて）ぞるる（箴丸）
- 31：水鳥や鴨越えに懲りずま（須磨）の 今は水そこ這ふ平家蟹（玉芳）
- 32：甲をさへ今はた（旗）色に取る^{よろひ}鎧 鋏の^{ぢう}鈕も持つ平家蟹（千住 紫竹園茂群）
- 33：世の中を横に車の平家蟹 廻る因果の壇ノ浦かな（驪山亭音高）
- 34：時めきし代の赤旗を平家蟹 ^{なれ}汝が甲羅の色に見せけり（八王子 檜旭園）
- 35：平家蟹空を飛び来る水鳥の 羽音に^お怖ぢて泡をふくらん（駿府 正舎銚直）

- 36：奢りたる平家も今は落ちぶれて おのれ飯炊く蟹となりけり（雪麻呂）
- 37：平家蟹八島の人は塩ゆでに すれども今の色は赤肌(赤旗)（上総前久保 楚川）
- 38：戦ひに負けし平家のゆゑならん 蟹となりても泡を吹くなり（南伊勢大淀浦 草寿庵有美）
- 39：西海に沈みぬれども平家蟹 甲羅の色もやはり赤肌（赤旗）（近江日野 敬喜）
- 40：落武者の哀れなる身（鳴海）の平家蟹 葦間隠れに世を忍ぶらし（記長喜）
- 41：平家蟹横這ひしつづつ海の上を 己がものとや誇るなるらん（武蔵金子 静下窟 好文）
- 42：一ノ谷^{さかお}逆落としなる須磨の浦 浪にただよふ平家蟹かも（小網飯沼 明保廻早起）
- 43：汐干には勢揃ひして平家蟹 浮世のさまを横に睨みつ（下毛小倉 楳良）
- 44：盛りにも直^{すぐ}なる道を行はず 今も横さにゆく平家蟹（常陸江戸崎 益友亭厚丸）
- 45：奢りたる末の報いに平家蟹 とられて今は口に入るらむ（匂々堂梅袖）

3 地名と人名

最初に、以上45首に詠み込まれた地名に注目してみたい。「壇ノ浦（壇の浦）」が23と33の2首。「八島」が26と37で同じく2首でタイとなるが、39の「西海」は、壇ノ浦を意味しているものと考えられる。さらに、23、33の壇ノ浦が屋島（八島）の壇の浦であった、あるいは両方の壇の浦に掛けている可能性も否定はできない。

そして「一の谷」が26と42の2首であるが、26は「八島」が、42も「須磨の浦」がそれぞれ「一の谷」に併記されている。ほかに、6には、一ノ谷の戦いを代表する地名「鶴越え」が詠まれている。18の「前の海後ろの山ゆ攻められて」もこの激戦地の地形を物語り、29の「敦盛」はこの戦いを代表する悲劇の犠牲者であった。

さらに、「須磨」が上述の42に加え、30、31の3首、また20の「泡をふく腹」は「福原」の掛け詞であり、30は「須磨と明石の浦」を併記している。以上8首（6、18、20、26、29、30、31、42）が一ノ谷の戦い（1184年）に関連する地名と内容を表現していることになる。

地名としては、さらに現在の兵庫県たつの市の「室の津」（7）、三重県の「伊勢」（13）、掛け詞であるが愛知県名古屋市の「鳴海」（40）が登場する。13の「伊勢と呼ばれし武士のはて」は地名を特定するというよりも、地名に由来する伊勢平氏の権勢を振り返るものである。

ほかに、地名は詠み込まれていないが、先の20における「まねきたる夕日」は「音戸の瀬戸」（広島県呉市）における日招きの故事に基づくものである。さらに、「水鳥」あるいは「水鳥（の羽音）」が5, 14, 31, 35の4首に詠まれている。水鳥の羽音を敵襲と誤認して平家側が総退却したという富士川の戦い（1180年）に基づく表現である。

以上を俯瞰すると、東から順に、富士川、鳴海、伊勢、福原、鴨越、一ノ谷、須磨、明石、室の津、屋島、音戸の瀬戸、壇ノ浦という源平の戦跡やゆかりの地を辿ることができ、それらが全て平家蟹と結びつけられるのである。ここに、平家蟹の成立と棲息の場を長門の壇ノ浦（赤間関）または讃岐屋島の海中に特定しようとするこれまで目を向けてきた多くの記録との相違を認めることができよう。例えば、「赤間関で入水した兵が蟹に化した」（『本朝故事因縁集』1689年）、「赤間関で入水した霊が蟹になった」（『諸国里人談』1743年）、「平家の一門が讃岐の屋島の浦で責め滅ばされ、その怨霊が蟹となった」（『日本山海名物図絵』1754年）、「赤間及び屋島の壇浦に没した魂が蟹になった」（『燕石雑志』1811年）などの記述があった。これらは、平家蟹を寿永4年（1185）の壇ノ浦の戦いにおける水死者または同年の屋島の戦いにおける水死・戦死者が化したと説くものであった。

狂歌の中でも、39の「西海に沈みぬれども平家蟹」や19の「友盛〔知盛〕のなりし蟹とも見ゆるなり 鉄に持ちし長刀ほほつき」はその延長線上にあるものといえよう。知盛は壇ノ浦で入水しており、平家蟹に化したというのは理解しやすい。しかし、「長刀」とあるのが気になってくる。『平家物語』では、壇ノ浦での入水に際して、長刀で奮戦したのは教経であり、知盛は鎧二領を着て入水している。知盛が長刀を持ち、また碇とともに入水する姿は能の『碇潜』『船弁慶』や人形浄瑠璃・歌舞伎の『義経千本桜』における「碇知盛」等を通じて流布したものと考えられる¹⁾。狂歌師たちが平家蟹へのイメージを形成するに用いた材料の多くには、芸能における変形や虚構が投影していると考えべきであろう。もちろん、『平家物語』や『源平盛衰記』も多くの変形や虚構の上に成立していることを忘れてはならない。

ところで、友盛〔知盛〕については平家蟹ばかりか船幽霊に化したという認識があったようである。船幽霊は「海上で遭難した溺死者たちの幽霊で（略）生者の船舶を沈没させ、新たな溺死者を自分の仲間にしようとするという」妖怪である〔多田 2008：275〕。『狂歌百物語』初編では「平家蟹」に先行して「船幽霊」に関する狂歌29首を収めているが、なんと、そのうち「友盛〔知盛〕」と詠み込まれているのが7首、「新中納言」が1首あり〔京極・多田・須永 2008：24〕、合計8首、すなわち約3割が船幽霊

の正体を知盛だというのである。ここにも芸能の影響を見て取ることができよう。

平家蟹と船幽霊は、溺死者が化したとされる点で類似している。撰者が、両者を隣接させたのは、そうした理解の上でのことであろう。ところが、平家蟹に関する狂歌は、溺死以外の死者も平家蟹に化したと説明している。例えば、29は、須磨の浦に没した「敦盛までも蟹と成らん」とある。『平家物語』の名場面であるが、敦盛は浅瀬を騎馬で船に向かう途中、熊谷直実呼び止められ、波打ち際に首を討たれている。入水でも水死でもないが、「蟹と成ったのであろう」というのである。波打ち際に落命したことが「蟹と成る」ことを合理化しているのであろうか。42の「一ノ谷逆落としなる須磨の浦浪にただよふ平家蟹かも」も同様であろう。「一ノ谷」に続いて「須磨の浦」という海浜の地名が追加されている。平経正をはじめ多数の将兵は逃げ場を失う。彼らは助け舟に向かう途中、源氏側の執拗な追撃により須磨の浅瀬で討たれているのである。

5, 14, 31, 35の4首には水鳥（の羽音）が登場し、富士川の戦いを描いていることはいうまでもない。富士川の戦いにおいては水死者も戦死者も出なかったと考えられるが、その総大将平維盛は後に那智の沖で入水自殺したとされ、蟹への化生という想像は理解しやすい。同様に、入水という要素に注目すれば、戦闘とは無関係に1183年豊前国柳浦にて入水自殺したとされる平清経も蟹に化したとされ、『大和本草』（1709）は「清経蟹」を平家蟹の異名としていた〔矢野他 1983：192〕。

4の「平家蟹兜蟹とや挑みあふ 鍛引せし昔しのびて」は屋島の戦いにおける平景清の「鍛引」に因むものだが、景清は平家滅亡後、頼朝に降り断食して死亡したとされる。この狂歌の作者、万丁庵柏木は、その景清もまた平家蟹に化したというのであろう。

狂歌の多くが伝えるのは、海上戦の水死者や入水した者はもちろんのこと、地上戦の戦死者や病死者も加え、平家一門がみな平家蟹に化したかような感覚である。

12の「奢りたる果こそ見ゆる平家蟹」や13の「平家蟹 伊勢と呼ばれし武士のはて」がその代表といえよう。さらに、20の「まねきたる夕日の色の平家蟹 泡をふく腹（福原）の昔偲びつ」では、病死した清盛もまたこの蟹に化生したかのように表現されていることになる²⁾。なお清盛は水を沸騰させるほどの高熱を発して死亡したとされる。その清盛が蟹に化したとするならば、赤く茹で上がったという想像も働こう。「夕日の色」にはそんな意味が込められているのかも知れない。また「泡をふく」というのは熱さに悶えながら「あたあた」としか発声できなかつた様に通じるのではないかと考えられなくもない。

さて、40の「落武者の哀れなる身（鳴海）の平家蟹 葦間隠れに世を忍ぶらし」は、『平家物語』巻第十の「海道下り」に取材し、一の谷で生け捕りになった平重衡（しげひら）が鎌倉に護送される途中の様を詠んでいる。「海道下り」では「いかに鳴海の汐干潟、涙に袖はしをれつつ」と記され、「鳴海」の地名が「如何になる身」に掛けてある〔富倉 1967 c：263-265〕。葦原は人間が身を隠すに相応しい場であるとともに河

口近くのそれは小蟹たちの楽園である。なお、「葦間」は「足間」に通じ、小型の蟹が人間の足に踏まれぬように脅える様が隠されているのかも知れない。重衡は翌1185年に、木津川畔で斬首されている。その重衡もが転生して鳴海の葦間の蟹になったというのであろうか。だとすれば作者の脳裏には木津川から鳴海へという水路が描かれていたのかも知れない。もちろん、木津川も鳴海の葦間もヘイケガニの棲息する場ではありえないのだが。

複数地名を併記する歌は他にもある。31の「水鳥や鴨越えに懲りずま（須磨）の今は水そこ這ふ平家蟹」は、冒頭の「水鳥」が富士川の戦い（1180年）を意味し、一ノ谷の戦い（1184年）に関する鴨越・須磨の2地名が続いている。26の「一の谷八島は落ちし平家蟹」はさらに翌年の屋島の戦い（1185年）を詠み込んでいる。ここで絵画に目を転じると、「一の谷と屋島合戦図の組み合わせは、源平合戦図屏風絵の中でも典型的なもの」だという〔神戸市立博物館 1997：10〕。さらに、錦絵には貞秀の「源平八島檀之浦長門赤間関合戦之図」に一例を見るように、屋島と壇ノ浦すなわち四国東部から本州西端までを鳥瞰する作品すら存在するのである。絵師たちには空間の制約があるが、狂歌師たちに与えられた制限は文字数のみであろう。彼らは源平の合戦に関する知識を狂歌に累積させ、同時に蟹に化した歴戦の勇士たちの複数の戦闘の記憶を回想させているのである。

上述のような地名の併記は、それとは一見対極にあるかに見える地名への不言及と同様に、平家蟹の壇ノ浦や屋島への特定を解き放ち、この蟹の成立と棲息の場を拡大することになる。これは同時に、全国の読者とこの蟹との距離を縮めることにもなる。そこには近年の都市伝説の流行の手法に通じるものを認めることができるようである。

4 「平家蟹」の諸特徴

さて、これら狂歌には、平家と蟹を結び付ける興味深い比喻表現が多用されている。そして、おそらく作者たちは誰一人として生体のヘイケガニを実見しておらず、その生態については無知であったと考えられる。一般的な蟹の属性に関する漠然とした知識や比較的身近な蟹の観察に基づく知識の延長線上に平家蟹のイメージを拡大していったものと予想される。ここで、以上の狂歌が描く「平家蟹」の諸特徴に注目してみよう。

横這い

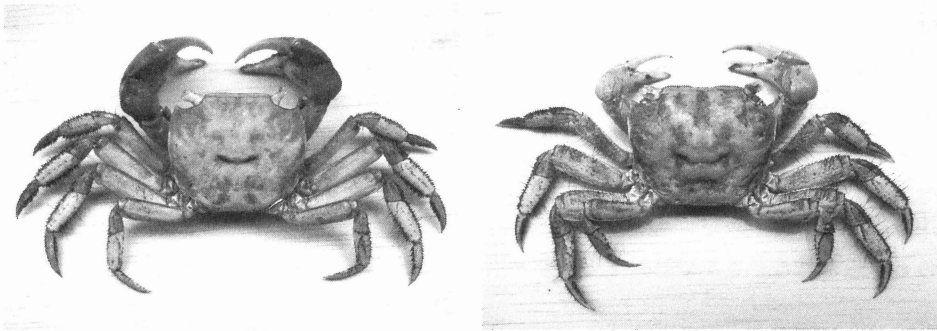
まず、一般的な蟹の性質に関してもっとも有名なものは、横這いであろう。蟹には「横行の介士」という異名があるが、「介」は鎧の意であり「介士」とは「甲冑を身に着けた武士」のことである（『日本国語大辞典』）。そもそも甲殻類には甲冑を身に着けた武士をイメージさせる条件が備わっていたのである。さて、蟹の横這いであるが、45首中11首もが横這いに関連する動作を詠んでいる。1「横にあゆみて」、15「横道を行く」、

16「横這ひ」、18「横ゆく」、22「横に道行く」、25「横に歩めり」、27「横に逃げ」、33「横に車の」、41「横這ひ」、43「横に睨み」、44「横さにゆく」である。16、18のように同情的なものもあるが、平家の横道・横行・横車という批判的な表現が目立つことになる。これらの意味を『日本国語大辞典』で確認すると、横道は「おうどう」と読んで「人道に背いたこと」の意。同じ表記を「よこみち」と読むと「人間としての正しい道からはずれること」。横行（おうこう）は「ほしいままにはびこること」。横車（よこぐるま）は「理不尽なこと」とある。平家蟹が横這いする理由を生前の平家一門の悪政と横道・横行に求め、転生後もそれを繰り返しているというのである。

泡吹き

20の「泡をふく腹（福原）の昔偲びつ」に関しては、先に清盛の断末魔の様子を描いた可能性について触れたが、これに21、27、35、38を加えた5首が「泡を吹く」と詠んでいる。

ところがである。蟹は「乾燥によって、えらの水分に不足をきたした時に泡を吹く」のであり、それは「水分要求、呼吸困難のサイン」なのだという。つまり「全てのカニが泡を吹くわけではない。陸上で生活するようになったカニ、つまりアカテガニやベンケイガニなどに限られる」という [村岡・小田原 1995:15]。したがって、海底に棲むヘイケガニの仲間が海底はもちろんのこと磯岩や波打ち際で泡を吹くというのは実際には考えにくい光景である。これに対し、アカテガニ〈写真3〉やベンケイガニ〈写真4〉は陸上から磯岩に這い下り、這い上がる。



〈写真3〉アカテガニ（脱皮殻標本）筆者撮影 〈写真4〉ベンケイガニ（脱皮殻標本）筆者撮影

ここで気になるのが、21の「石垣の穴にこもれる平家蟹 浪の寄せ手に泡や吹くらん」である。後述するように、アカテガニやベンケイガニは石垣の穴を好み、さらにアカテガニのメスは、海岸で放卵の際、興奮するためか、粘性の高い水を出してぶくぶくと泡を吹くという [小田・桜井 1996:23]。ベンケイガニも同様であろうが、21はこれら

の蟹の観察に基づいて詠まれた可能性が高いといえよう。

もちろん、脚を縛られたガザミ（ワタリガニ）〈写真5〉などの食用の海蟹が市場や魚屋の店頭あるいは料理店のケース内で泡を吹いているのを見かけることがある。それは思いがけず空気にさらされ、えらの水分に不足をきたした異常な状態であり、自然の姿とはいえないことになる。とはいえ、狂歌師たちが、調理前のガザミ等の泡吹きを観察しており、それを上記の歌に詠み込んだという可能性もあろう。海蟹は人間に「泡を吹かされた」のであるから、かれらの「驚きあわてた」様子は陸上の蟹以上に強調されてもよいだろう。



〈写真5〉ガザミ（ワタリガニ）筆者撮影

飯炊き

続いて注目したいのは5首（2, 11, 12, 23, 36）に認められる「飯炊き」である。36の「奢りたる平家も今は落ちぶれて おのれ飯炊く蟹となりけり」が端的に示すように、かつての貴人たちの零落が表現されている。しかし、蟹と飯炊きはいかに連想されたのだろうか。そこには、蟹の泡吹き、抱卵および放卵、砂団子作り、ウェーピングの4要素が指摘できそうである。第一の泡吹きだが、蟹が泡を吹く姿を炊飯の際に泡が出る様子に譬えたと考えられないだろうか。とはいえ、上記の通り、泡を吹く蟹はアカテガニやベンケイガニの仲間に限られる。なお、放卵前のアカテガニやベンケイガニのメスは腹の下に大量の卵を抱えており、こうした姿は比較的容易に観察できるが、卵の粒は米粒あるいは飯粒に喩えられそうである。これが第二の可能性である。11には「群れつつ飯を炊く平家蟹」とあるが、駿府（現在の静岡市）在住の作者は、アカテガニやベンケイガニが集団で磯岩に降りて僅かな時間に放卵するのを観察していたのかも知れない。

第三の可能性だが、スナガニの仲間は砂に混じった有機物を濾し取り、砂団子を残す。コメツギガニやチゴガニは干潟の巣穴の周りで多数の砂団子を作るが、その様子は握り飯を作っているように見えなくもない。2は「汐煙立てて飯炊く平家蟹 兵糧方の武士

のはて」と詠み、23には「兵糧飯も炊く平家蟹」とある。握り飯は兵糧飯の代表であったと考えられる。43は飯炊きには触れていないが、「汐干には勢揃ひして平家蟹」とあるのも干潟に群れるスナガニたちがモデルであるように考えられる。11の「群れつつ飯を炊く平家蟹」は、コメツキガニやチゴガニの群れと大量の砂団子を連想させはするが、上の句に「磯岩に」とあることから、スナガニの仲間とは考えにくく、11については、アカテガニやベンケイガニがモデルであった可能性が高い。

第四のウェービング (waving) であるが、スナガニの仲間のオスが鉋を上下に動かす行動で、その目的はメスへの求愛やなわばりの主張にあるとされる [小田・桜井 1996: 8-10]。コメツキガニやシオマネキという和名はその動作に基づくもので、前者の場合はその動作がまさに米搗きに喩えられたのである。蟹たちは、米搗き (精米) から炊飯、握り飯作りまで、一連の「飯炊き」を行っているように見ることができるのである。

ところで、5首中3首は実際の炊事との相違に言及している。「烟も立てず飯や炊くらん」(12)、「汐煙立てて飯炊く」(2)、「火の消えしごとにはあれど」(11)と、火や煙のないことをわざわざ詠んでいるのはなぜだろうか。それは、虚構であることに駄目を押しているようでもあるが、富士川の戦いにおいて、伊豆・駿河の民があちこちで炊事をする火を、敵兵が大勢いると誤認したこと、また倶利伽羅峠の戦い(1183年)における木曾義仲による「火牛の計」への反省を引きずっていると読めなくもない。同時に、平家の落人たちが火や煙によって敵に存在を知られることを怖れたという伝承を受けているのかも知れない。例えば、栃木県日光市湯西川温泉では、平忠実らが明神ヶ岳山中に隠れ住んでいた当時、追っ手に気付かれぬよう煮炊きの煙や夜間の火の明かりに気を付けていたと伝えられている³⁾。なお、12を詠んだのは下野に隣接し日光街道に近い結城在住者であった。

目を空ざまに

富士川の戦いに因み、水鳥に怯える様を詠む歌を4首数えた。干潟の蟹はシギなどの水鳥が天敵であり、スナガニの仲間は眼柄が非常に長く警戒心が強い。5の「目を空ざまにして」、6の「空ざまに目のつく平家蟹」は、これらスナガニが眼柄を上方に突き出したイメージを上手に捉えたものといえないだろうか。この点では、コメツキガニやチゴガニに加えオサガニやヤマトオサガニも有力候補になろう。ただし、「空ざまに目のつく」というのは甲羅に認められる人面模様上の目のことだという解釈も成り立とう。蟹が斜面にいない限り、その甲羅は上を向くことになるので、模様上の目も自ずと空を向くことになる。オサガニやヤマトオサガニの甲羅にはかなり立派な人面模様を認めることができるので、この2種に関しては、2つの意味で「空ざまに目」がついていることになる。

爪長

爪の長いことを強調する2首がある。多くの蟹の歩脚の第一節は長い爪のように見え、ヘイケガニもしかりである。『日本国語大辞典』によれば、人間の「つめが長い」は「欲が深い。貪欲である」の意。また、「爪長（つめなが）」は「非常に欲深いこと。けちなこと」を意味している。

17は「欲深き海の底なる平家蟹 爪長くせし人の果てかも」とあり、25は「奢りたる昔を偲ぶ平家蟹 爪長くして横に歩めり」と詠んでいる。ともに『平家物語』冒頭の「おごれる人も久しからず」、そこから派生した慣用句「驕（れ）る平家も久しからず」が念頭にあるのだろう。「爪長」すなわち、驕り、貪欲という平家の性格が、先の「横行」のイメージと同様に、転生後の生物の形態上の特徴に引き継がれているという発想である。なお、『日本国語大辞典』によれば、欲深を「爪長」というのは『『爪に火をともす』の諺から、火をともすために爪を長くするの意』だという。一方、小泉一雄氏は父八雲が英訳した上記17の歌を解説するなかで「爪長くするとは他人の物までも掻き集めて自分の懐へ詰込みたがる慾深との意味でしょう」と記している [小泉一雄 2002 (1934) : 20]。ここでは、こうした意味での隠喩と理解した方がよいようである。平家蟹もまた長い爪で餌を貪欲に掻き集めているのだという想像が作者と共有できそうである。しかし、実際に蟹が餌を口に運ぶのは鉗脚（はさみ脚）によってである。鉗脚は「カニ爪」とも呼ばれ、食材としてのズワイガニのそれが想起されよう。先の狂歌においても「爪長」の「爪」とは鉗脚を意味しているのだと解釈することができる。そうすると、「爪長くして横に歩めり」からは、片方の鉗脚が異様に長くて大きいシオマネキ類のオスの姿が浮かび上がってくる。

赤・紅・緋

平家蟹の色彩について「赤」「紅」「緋」と描くものが5首（1, 7, 24, 34, 37, 39）ある。さらに「まねきたる夕日の色の平家蟹」（20）、「甲をさへ今はた（旗）色に取る鎧」（32）は色彩名に直接触れていないが、夕日や平家の旗のように赤いということになる。平家蟹の体色については、『折々草』（1771）の記載に関連して前稿で論じたが、少なくともヘイケガニの生体は暗紫色であり、紅色や赤色と見るのはやや苦しい。それを赤と呼ぶのは第一に、32, 34, 37, 39に見るように平家の赤旗を赤肌に掛けているからであろう。

酒井恒氏は「屋島や壇の浦辺でみやげものに売っているへいけがにの標本も赤い色に染められている」と記している [酒井 1980 : 193]。現在下関市内で販売される平家蟹のレプリカが赤く彩色されているのも、これらの狂歌と同様、平家の赤旗に因むものといえよう。狂歌の作者たちの中には、赤く染められた平家蟹の土産を手にしていた者もいたかも知れない。

なお、彼らが平家蟹を赤色としたことには、もう一つの理由が想像される。それは彼

らにとって食用の蟹として身近だったのがガザミをはじめワタリガニ科の蟹であり、これらが加熱によって赤くなるからである。食卓上の知識が平家蟹の色に投影され、それを平家の赤旗のイメージに結び付けたという想像である。

平家蟹が赤く描かれることには、さらにもう一つの解釈が可能となろう。それは実在の赤い蟹をモデルにしたという説明である。竜閑斎による挿絵の3尾の平家蟹も赤みを帯びて波打ち際を這っているが、生時に赤みを帯びている蟹の代表は、個体差はあるが、アカテガニやベンケイガニであろう。先述のように、これらの蟹は泡を吹くことでも、磯岩を這い登ることでも、一連の狂歌の表現に合致していた。もちろん爪も長い。狂歌の平家蟹は当然に海の蟹として描かれるが、これらの蟹はともに波打ち際で放卵するので、挿絵や複数の狂歌のモデルがこれら陸上の蟹であった可能性が高い。ここで、24の「負け軍無念と胸に挟みけん 顔も真赤になる平家蟹」が気になってくる。とくにアカテガニの甲羅にはヘイケガニには及ばないものの人面模様を認めることができる。アカテガニはその名の通り鉗脚の赤みが目立つ。ただし、色彩については個体差が大きく、甲羅全体を顔に見立てたとするならば、ベンケイガニの方が相対的に赤みが目立つが、人面模様についてはその逆となる。アカテガニはとくに甲羅の前縁から前側縁にかけて、すなわち前方側が赤い個体が多い。甲羅の前方には目や口があり、そこを「顔」と呼んだとすれば、24がアカテガニをモデルにしていた可能性が再浮上してくる。「顔も」というのは顔以外にも赤い部位があることを示している。これもアカテガニがモデルだったとすれば、アカテ(鉗脚)に加え、顔(前縁から前側縁)も赤いという意味になろう。「無念と胸に挟み」というのも、無念による赤変が鉗脚にも連続しているという意味であろうか。

なお、アカテガニとベンケイガニは外見も生態もよく似ており、しかも同所的に棲息している。岡山県、山口県、大分県にはアカテガニをベンケー、ベンケイガニ、ベンケーガニと呼ぶ地域もある [宮島水族館 1986: 106]。狂歌師たちの何人かは平家蟹像を描くに当たり、アカテガニやベンケイガニをモデルにしていたと推測できそうであるが、彼らにも両者の識別は容易ではなかったと想像される。

その他、1の「紅き毛の生えてぞ見ゆる平家蟹 おらんだ文字の横にあゆみて」は「紅き毛」が生えているように見えるというのであるが、実際のヘイケガニは脚に体毛があるが、さほど目立たない。また、キメンガニには甲羅にも体毛が認められるが、決して赤くはない。アカテガニやベンケイガニも脚に体毛を持つがやはり赤くは見えない。下の句に「おらんだ文字の横にあゆみて」とあるので、紅毛人(オランダ人)のイメージを平家蟹に重ねたのであろうが、作者はオランダとの交易の下地に清盛による日宋貿易や港湾整備の恩恵を詠み込んだのかも知れない。

ところで7の「緋の袴し面影や室の津へ 身を沈めたる平家蟹らは」であるが、「緋の袴」は「主として成人の女子が着用したもの」であるので(『日本国語大辞典』)、入

水した平家の女性たちも平家蟹に化したというのであろうか。関門海峡近辺では平家の女性たちは入水してマダイの幼魚コベケに化したという伝承があるが〔蛸島 2013：96〕、女性たちも平家蟹に化したというのは気の毒である。もちろん、平家蟹のオス・メスの識別に関する知識や関心があれば、平家の男性たちがオス・メス双方の平家蟹に化したという説明自体がむしろ不自然に聞こえるかも知れない。いずれにせよ、女性性を強調し、かつ地名「室の津」が登場するこの作品の背後に、作者、松廻門鶴子はいかなる想像を張り巡らしたのだろうか。

『平家物語』巻第八の「室山合戦」は寿永2年（1183）の室山の戦いを描いている。知盛ら二万余人が小船に乗って播磨国に渡り、室の津の背後の丘、室山に陣取り勝利している。水嶋に続く室山での勝利に平家は勢いづいたのである〔富倉 1967b：547-550〕。短期間ではあるが、平家は再び栄華を取り戻したものと見えよう。なお、巻第十「藤戸」には、源範頼らが平家追討のために「播磨の室（の津）にぞ着きにける」とあり、佐々木盛綱による民間人殺害という極めて悪質な事件が描かれるが、平家側の戦死者についての記載はなく、また「緋の袴」にも触れてはいない。室の津と緋の袴はいかにして結び付けられたのだろうか？ 範頼らは、室の津と高砂で休み、遊君・遊女たちを召し集め、遊び戯れる月日を送ったという〔富倉 1967c:402〕。源氏の相手ではあったが、室の津の遊女たちは緋の袴を履いていたであろう。『法然上人絵伝』第三四には、法然が室の津の海上で船に乗った遊女を教化している場面が描かれるが、その遊女は緋の袴を履いている〔小松 1990：150〕。また、『摂津名所図会』は、「江口の君」と西行に関する故事古蹟について詳述する中で、證空上人が播州室津の遊女に普賢菩薩の姿を見たという『撰集抄』の記載を引用し、これを江口の遊女に^{なぞら}准へて謡曲「江口」が作られたと記している〔秋里 1975:408-409〕。ここでも室の津と遊女が結びつく。さて、「江口の君」すなわち、遊女妙であるが、なんと彼女は平資盛の娘であり平家没落後乳母の里の江口に隠れたという伝承が『江口君堂縁起』に記されているという〔三善 2008：250〕。もしかすると博覧な狂歌師の取材先はそんな所にまで及んでいたのかも知れない。港町、室の津（室津）の遊女は江戸時代でも有名だったようである。宝暦年間（1751-1764年）の室津は家数729、人数3,251に対し、遊女屋4軒・77人を数えたという〔角川日本地名大辞典編纂委員会・竹内 1983, 10：1471〕。

ここでもう一度「緋の袴着し面影や室の津へ 身を沈めたる平家蟹らは」を注視するならば、「身を沈め」というのが、入水ではなく「（遊女へ）身を落とした」という意味にも解しうるように思われる。先の資盛の娘に限らず、平家の没落後、その女性たちがやむなく遊女になったという伝承は壇ノ浦を臨む赤間関に根強いようである。例えば、『続未曾有記』（1805）は、同地の遊女に触れて「平家入水の後、死を遁れし婦人女子、身命をつなくよすがに容色を売て世を渡しし遺風也」という伝承を紹介している〔遠山 1991：209-210〕。このような知識あるいは想像がこの狂歌の背景にあったと考えられ

よう。

なお、小泉一雄氏は「西海に沈みぬれども平家蟹 甲羅の色もやはり赤旗」(39)を補足解説するなかで、古来源氏及び白を男性に譬え、平家及び赤を女性に喩える場合が往々あるようだと言及したうえで、「沈みぬれどもは濡れどもの掛詞とも思われ」と指摘している[小泉一雄 2002(1934):22]。「濡れ」には性的な意味も含まれよう。そのように理解するならば、少なくともこの歌において、赤色の平家蟹はより女性性を増すことになる。

食用？

筆者がもっとも注目したいのは、平家蟹の食用を示唆する歌が2首あることである。前稿を振り返ると、医師であった新宮涼庭の『西遊日記』に、1813年の下関における平家蟹の食用の記述があり、筆者はその正体をガザミ(ワタリガニ)であろうと推測した[蛸島 2013:104]。さらに秋里籬島の『撰西奇遊談』(1810年序)の「平家蟹」の条における「諸人且此蟹を食はず。漁の網にかかるとも、かならずはなちやる事なり」に注目したが、そこで筆者は「且」を「以前」の意味に解して、籬島の執筆当時にはこの禁忌が弛緩して食用が開始されていた可能性を指摘した[同:103]。その後、「且(かつて)食はず」を「決して食べない」と解釈した方が自然であると気付かされたが、禁忌弛緩説もまた捨てがたい。繰り返しになるが、京都在住の籬島は、赤間関の平家蟹の形が尼崎・天王寺近辺の「島むら蟹」に似ていると記しており[同:103]、筆者は、島村蟹の正体をガザミ(ワタリガニ)であろうと推測し、かつガザミの食用を禁忌とする伝承を知らずにいるからである。さらに、これまで見落としていたが、同じく籬島による『撰津名所図会』(1796-1798)巻三に「島村蟹」の項があり、土地の人によれば、島村左馬助の怨念がこの鬼面の蟹に化したというのだが、「此邊^{このあたり}美味なりとて、多く蟹を食す事多し」と結ばれている。怨念が伴うという伝承を知りながら島村蟹が食用されていたというのである。とはいえ、この蟹は「野里川^{のきとがは}より出づる」とあるので[秋里 1975:374]、ワタリガニの仲間ではなくモクズガニであろうかとも推測される。モクズガニは確かに美味であり、やはり甲羅に人面模様を見て取れなくもない。もちろん、漁師たちが野里川から沖へ出漁していたと考えるならば、「島村蟹」の正体は再びワタリガニとなろう。

さて、狂歌に戻ろう。45の「奢りたる末の報いに平家蟹 とられて今は口に入るらむ」の「口」は人間の口をいうのであろう⁴⁾。「栄華を誇ってわがままな振る舞いを続けてきた報いとして平家蟹となり、いまでは他人に食べられているのだろうか」という意味になる。奢って美食に興じてきたであろう者にとっては最大の転落であり、平家の零落が強調されている。作者の匂々堂梅袖は、平家蟹が食用されるものと想像していたようである。

いずれにせよ、実際のヘイケガニを人間が食用にしたとは考えにくい。ヘイケガニの食用、というよりもその禁忌については、イギリスの遺伝進化学者ジュリアン・ハックスレイによる「人為淘汰による動物の擬態」とする説が『民間伝承』誌上で紹介され[ハックスレイ 1951：356]、即刻反論される。反論したのは酒井恒氏であり、その根拠は、人類出現以前のマメヘイケガニの化石の存在であった[酒井 1951：454-455]。酒井氏によればヘイケガニの「肉の量は少いし、煮たり焼いたりしては食べられないはずで（略）戦時中の食料不足でもヘイケガニは使用しなかったよう」だという[同：454]。したがって、梅袖の狂歌や涼庭の日記が描く食用の「平家蟹」があったとすれば、ヘイケガニ科の蟹ではなかったことになる。

もう一首、平家蟹の食用を想像させるのが、37の「平家蟹八島の人人は塩ゆでにすれども今の色は赤肌（赤旗）」である。讃岐八島（屋島）の人々は一体何のために平家蟹を塩ゆでにしていたのだろうか。もしもこれが本物の平家蟹すなわちヘイケガニ科の蟹だとすれば、土産物作製のためと考えられ、食用であるならば他の蟹だと考えるべきであろう。塩ゆでという方法が注目されるが、その目的は食用のための調味だったと考えるのが自然である。良質の標本作成のためならば、脚の脱落を防ぐことが大切となる。料理の専門家によれば、蟹をゆでる際には、自切による脚の脱落を防ぐために殺すか仮死状態にしておくことが重要で、塩を加えるかどうかは問題ではないはずだという。筆者は、死亡したヘイケガニとキメンガニの煮沸実験を行ったが、塩を加えずとも脚の脱落はなかった。明治末期まで讃岐屋島や高松が平家蟹の標本の供給地であったことが気になるが[宮武 1952：158]、この歌の作者、楚川の意識においては、「塩ゆで」とはやはり食用目的のそれであろう。楚川は上総前久保の人で、屋島での「平家蟹」や「塩ゆで」を実見した可能性も、また伝聞していたという可能性もともに高くはないだろう。上総前久保とは現在の千葉県富津市前久保であろう。目前の東京湾はガザミ（ワタリガニ）の名産地であり、富津は現在もワタリガニの産地として有名である。楚川もまた塩ゆでにして赤くなった蟹を食していたに違いない。黄緑褐色のガザミは煮沸によって見事に赤変するのである。37には作者の地元での知識が、遠く屋島の平家蟹に投影されたと考えることもできる。

人面模様

国語辞典や本草書、また多くの紀行文は平家蟹の甲羅の人面模様にこぞって触れているが、狂歌の場合、そのことに触れているのは意外にも1首のみであった。29の「一念が凝って背びらに面の皮 敦（厚）盛までも蟹と成るらん」である。「一念が背中に凝集してこわばらせ人面が厚く盛り上がり、敦盛までも蟹と成ったのであろうか」という意味になろう。「面の皮が厚い」とは敦盛像には不似合いであろうが、作者は洒落を優先させたのであろう。むしろ注目したいのは、「こわばって厚く盛り上がる」という

表現が、単なる模様ではなく隆起した模様を形容していることである。他の蟹の甲羅にも凹凸が認められるが、ヘイケガニの仲間は甲羅が小さいにもかかわらず隆起が大きく、なによりもその人面模様は蟹の中でも際立っており、まさに「一念」がこもっているかのようなのである。作者、鈍々舎嘉勝はヘイケガニの標本を実見していたのかも知れない。

他の生物

一連の狂歌の中には他の生物との関係を詠んだ作品も多い。

水鳥

繰り返しになるが、5, 14, 31, 35の4首には富士川の戦いにちなむ水鳥が登場していた。海中に棲息するヘイケガニ類が水鳥に捕食されるとは考えにくい、干潟や磯の小蟹たちにとってシギやサギなどの水鳥は天敵である。5の「水鳥に今もおどろく平家蟹 逃げながら目を空ざまにして」は、「平家」の二文字を除けば、干潟や磯の多くの蟹たちに当てはまるものといえよう。すでに述べたように「目を空ざま」からは眼柄の非常に長いスナガニ科の蟹が連想される。一方、35の「平家蟹空を飛び来る水鳥の羽音に怖でて泡をふくらん」も実際の観察に基づくものだと仮定するならば、「泡をふく」ことからアカテガニやベンケイガニが有力候補となろうが、サギ類はかれらの天敵であった。

なお、ヘイケガニ類が水鳥に捕食される可能性もゼロとはいえない。酒井恒氏は潮の干満の差が著しい有明海におけるヘイケガニの浮上を観察している。大潮の日に「引き潮の流れに乗って沖へ移動するがそのときには背中のかぶりものを捨てて、水面に浮かび上がり、背を下にして長いほうの四本の脚でいかにも不器用なバックストロークで水面を打ちながら沖へ沖へと移動していく。引き潮の流れはまったくの泥のにごりで、へいけがには白い腹部を水面にあらわしながら、あとからあとからと移動していくのである」[酒井 1980:44]。このような状態ではアジサシなどの水鳥に捕食されそうである。酒井恒氏はこの光景をカメラに収めようとしたが、「カメラをさしだすといちやくこれに感づいて水に潜ってしまう。泥水の面をこのような格好で泳いでいてもやはり警戒は絶えずおこたっていないらしい」と記している[同:44-45]。「水鳥に今もおどろき」「逃げながら目を空ざまにして」は特殊な状況下においては平家蟹にも当てはまるものといえようが、江戸時代にこのような観察に基づく知識が狂歌師たちにも流布していたとは考えにくい。

蟹

他の蟹との戦いを描くものが2首ある。3の「中々に岸に三つ四つ平家蟹 弁慶蟹をとりこにぞする」は、文学的には見事な組み合わせといえようが、海中のヘイケガニが陸

上のベンケイガニと対戦することはありえない。陸上でベンケイガニを捕えそうな蟹はアシハラガニであろうか。あるいは「とりこ」というのは蟹たちの戦闘ではなく交尾の姿であるかも知れない。多くの蟹たちはオスとメスで大きさや形状、色彩を微妙に異にする。作者が、交尾するオス・メスを異種間の蟹の戦闘と誤解した可能性もあろう。

なお、上述のように、いくつかの狂歌にみる平家蟹のモデルがベンケイガニにありそうなこと、また平家蟹を描く錦絵にもベンケイガニをモデルとするものがあること〔蛸島 2013:105〕を考慮すれば、「中々に歌に三つ四つ平家蟹 弁慶蟹をモデルにぞする」などと詠んでみたくもなる。

4は「平家蟹兜蟹とや挑みあふ 鋸引せし昔しのびて」とある。ここでいう「兜蟹」はカブトガニ科のカブトガニとは限らない。「兜蟹」は平家蟹の異称としても使用されてきたのである。「鋸引」とあるのは、平景清の屋島の戦いにおける武勇譚である。『平家物語』巻第十一「弓流」によれば、景清は、長刀を左手の脇にはさんで、右手をさしのばして、三保谷の十郎の兜の鋸を掴み、これを引き切ったのである。能の『八島』では、景清の対戦相手は、三保谷四郎となるが、この武勇譚を視覚的に訴えることになる。景清の対戦相手を「兜蟹」とするのは「兜の鋸」に因んでのことで、具体的には三保谷の十郎（三保谷四郎）が兜蟹に仮託されたのであろう。

魚

10の「鯛ひらめ中に交れど平家蟹 けして奢りの座には出ぬなり」は平家蟹の栖息場所を海中に特定している。生前の平家の貴人たちは、奢りの座で鯛やヒラメを賞味していたのであろうが、立場は激変している。実際の海底では、むしろ、ヒラメが平家蟹を捕食する場面が観察されるかも知れない（注4参照）。

海老

13の「海そこの海老とむつみて平家蟹 伊勢と呼ばれし武士のはて」は伊勢平氏の末裔が平家蟹に化し、伊勢海老と仲良く過ごしているというのであろう。

長刀ほほつき

19は「友盛〔知盛〕のなりし蟹とも見ゆるなり 鋏に持ちし長刀ほほつき」と詠んでいる。知盛と長刀との関係については先述したが、「長刀ほほつき」すなわち「薙刀酸漿（なぎなたほおずぎ）」は『日本国語大辞典』によれば、「海ほおずぎの一つでアカニシの卵囊。形はなぎなたの刃に似ており、紫色を帯びる」とある。ただし、アカニシの卵囊はもともとは薄い黄色であり、紫色を帯びるのは乾燥後である。ヘイケガニがアカニシの卵囊を捕食して鋏にはさむことはありえよう。あるいは作者は、潮の引いた磯で、他の蟹がアカニシの卵囊を食す光景を目撃していたのかも知れない。

5 棲息場所

以上、一連の狂歌が平家蟹の多様なイメージを伝えていること、そしてそのモデルが複数種の蟹にわたるであろうことを予想してきた。最後に、狂歌に詠まれた「平家蟹」たちの住処あるいは棲息場所について整理しておきたい。実際のヘイケガニは浅海の海底に棲息するが、狂歌は海底から地上の石垣の穴に至るまでさまざまな住処を仮定しているようである。ここで、甲殻類の専門家による蟹の棲息場所の分類法を確認しておきたい。村岡健作・小田原利光両氏は、「磯岩」「浅い海」「砂浜」「干潟」「河口」「淡水」「マングローブ」「サンゴ礁」「イシサンゴの枝」「漂流生活」「深い海」「寄生・共生」という分類を示している〔村岡・小田原 1995〕。また、天野勲氏は、カニについて「岩礁をすみかにするカニ」「(広義での)干潟をすみかにするカニ」「巣穴や岩の隙間をすみかにするカニ」「漂流生活をするカニ」「二枚貝に寄生(共生)をするカニ」という5分類を行い、「岩礁」については「潮間帯」と「海中」に2分し、「干潟をすみかにするカニ」の棲息場所を「林」「草原」「葦原」「干潟」「海中」の5つに細分している〔天野 2002: 42-45〕。両文献ともにそれぞれの場所に棲む代表的な蟹を挙げているので、狂歌に描かれた蟹のモデルを比定するうえで大変参考になる。とはいえ、江戸の狂歌師たちの知見や観察は当然に限られ、空想や想像が加わっているはずである。それを念頭に置きながらも、棲息場所・目撃場所が明記あるいは特定しうる歌を全45首中17首数えることができる。その場所と内訳は、「海中」6、「海上」2、「岸」1、「波打ち際」1、「浜辺」1、「汐干」1、「磯岩」1、「穴」1、「葦原」1、「石垣の穴」2首となる。この中で、「岸」「波打ち際(波の来しかた)」「浜辺」「汐干」とあるのは砂浜なのか岩浜なのか判然としないことなどから、この分類を専門家の分類に当てはめることは困難である。しかし、それぞれの歌に与えられた他の情報を加味することで、ある程度蟹の種類を限定できそうである。さらに、甲羅の人面模様が狂歌師たちの共通認識であったと仮定するならば、候補はより限られることになる。それぞれのモデルたるにふさわしい実在の蟹は何であろうか？

海中

平家蟹が海底に棲むと明記しているのは、「海そこ」(13)、「(欲)深き海の底」(17)、「水そこ」(31)の3首に過ぎない。他に「身を沈めたる」(7)、「鯛ひらめ中に交れど」(10)、「沈みぬれども」(39)の3首があり、合計6首が海底・海中、すなわち広義での海中をイメージしていることが確認できる。ヘイケガニやワタリガニはその候補となる。

海上

41の「横這ひしつづ海の上」、42の「浪にただよふ」は海の上を意味しているが、棲

息場所とは言いがたいだろう。作者の想像や言葉のあやに過ぎないと片付けるべきかも知れないが、何らかの蟹の観察に基づくものとも考えることもできる。そうなると、ワタリガニの仲間はその名の通り有力候補となろう。かれらはヒレ状の遊泳脚を持ち海面近くを遊泳することもできる。さらに、「海の上を這ひ」、「浪にただよふ」ことは特殊な状況ではヘイケガニにも可能なようで、酒井恒氏は先述のように有明海におけるヘイケガニの浮上と水面上の移動を観察している。ただし、狂歌師たちにその知識があったとは考えにくい。

岸・浜辺・波打ち際・汐干

「岸に三つ四つ」（3）、「波の来しかた」（23）、「浜辺」（27）、「汐干には勢揃ひ」（43）は、砂浜なのか岩浜なのかが不明である。両方を含めると、そこに棲む蟹は実に多種多様となる。多分に筆者の主観が加わるが、人面の連想という要素で絞り込むと、オサガニ・ヤマトオサガニ・オオヒライソガニ・オウギガニなどが候補となり、キンセンガニ・コブシガニなども人の顔に見えなくもない。

いずれにせよ、海底に棲むヘイケガニ科の蟹はすでにここで候補から除外されることになる。なお、くどいようだが、水鳥に怯える様を詠むものが4首（5, 14, 31, 35）あり、これらも干潟⁵⁾に棲む蟹をイメージしているものと考えられる。ただし31は、富士川の戦いや一の谷の戦いを経て「今は水そこ這ふ」と詠んでおり、海底をその棲息場所とするものであった。

磯岩

11は「火の消えしごとにはあれど磯岩に 群れつつ飯を炊く平家蟹」と詠んでいる。「磯岩」は広義での「岸」や「浜辺」に含まれよう。磯岩に群れる蟹の種類は少なくないが、スナガニの仲間はまず除外されよう。さらに、下の句の「群れつつ飯を炊く」から候補を絞ると、先述のように、アカテガニやベンケイガニの泡吹き、抱卵および放卵が連想される。

穴

「穴」もまた広義での「岸」や「浜辺」に含まれよう。26は「一の谷八島は落ちし平家蟹、甲羅に似せし穴に住むらん」とあり、「蟹は甲に似せて穴を掘る」という格言を詠み込んでいる。「人は自分の力量、身分に応じた言動をするものだ、また人はそれぞれ相応の願望を持つものだ」の意であるが（『日本国語大辞典』）、連敗を喫した平家は、その立場に相応しく穴の中に住んでいるのだろうか、というのであろう。なお、酒井氏はこの格言に関連して「実際には穴を掘る習性のかにはごく少数である。海底に住むかにのなかには砂や泥に潜りこむ習性は発達しているが穴は掘らない」と記している〔酒

井 1980：60]。ヘイケガニは穴を掘らないのである。「らん（らむ）」という推量の助動詞で結ばれているので、作者、国吉を責めることはもちろんできないが、先のアシハラガニや、スナガニの仲間、またアカテガニ・ベンケイガニが巣穴に住むことからの想像であろうか。

葦原

「葦原」は「岸」や「浜辺」に連続している。40は重衡の海道下りに取材し、「落武者の哀れなる身（鳴海）の平家蟹 葦間隠れに世を忍ぶらし」と詠んでいた。河口近くの葦原は、その名もアシハラガニなどの楽園である。アシハラガニに加え、モクズガニ科のハマガニも同様に葦原に巣穴を掘って生活するが、ハマガニは夜行性で日中は巣穴にこもっていることが多いという [三浦 2008：86]。したがって観察しやすいのはアシハラガニであるが、この蟹の甲羅にもアカテガニに似た人面模様がうかがわれる。かつての鳴海は海浜に近く、泣き濡れてアシハラガニと戯れる重衡の姿が想像できなくもない。

石垣の穴

石垣は人工物であり、その穴（隙間）に棲むのは陸上の蟹となる。「石垣の穴にこもれる平家蟹」(21)、「備へも堅き石垣の穴」(28)と2首が「石垣の穴」を詠んでいるが、そのモデルはアカテガニかベンケイガニであろうと考えられる。アカテガニは「水田のあぜ道や小川の土手に穴を掘ってすんでいる。人家の周囲の石垣のすき間なども絶好のすみかとなる」のである [村岡・小田原 1995：6]。

以上の狂歌にうかがわれる棲息場所ごとに、歌の数を示し、また、そこに棲息する蟹の中から候補を絞ると〈表1〉のようになる。

〈表1〉狂歌17首にみる棲息・目撃場所と想定される蟹の候補

棲息・目撃場所	数	想定される蟹の候補
海底・海中	6	ヘイケガニ
海上	2	ワタリガニ
岸・浜辺	4	オサガニ・ヤマトオサガニ・オオヒライソガニ・オウギガニ
磯岩	1	アカテガニ・ベンケイガニ
穴	1	スナガニの仲間・アシハラガニ・アカテガニ・ベンケイガニ
葦原	1	アシハラガニ
石垣の穴	2	アカテガニ・ベンケイガニ

6 まとめと考察

以上、『狂歌百物語』における平家蟹について長々と論じてきたが、45首が描く平家

蟹像は、この蟹に平家の栄華や横暴、戦いの様などを仮託したものであり、実際のヘイケガニとはかけ離れたものが多い。諧謔を旨とする狂歌に、博物誌のような正確さを求めるのは酷であるが、以上を整理すると、つぎのようになろう。

まず、蟹への化生を説き、蟹としての生活の様を描くことによって、平家の栄華からの転落が強調されている。また、本草書や地誌、紀行文等が、平家蟹は壇ノ浦や屋島の戦いにおける水死者が化生したものと記すのに対し、狂歌の多くは、地上戦の戦死者や病死者も加え、平家一門がみな平家蟹に化したかのような感覚を伝えている。人名については直接詠まれているのは、知盛と敦盛のみであった。しかし、清盛、維盛、重衡、景清にかかわる事件が語られ、かつ彼らもみな、加えて、緋の袴の女性たちさえも、平家蟹に化したかのように説かれているのである。平家蟹の誕生や棲息の地を特定するのではなく、むしろ源平の合戦に因む複数の知識の蓄積の上にこの蟹が成立したかのように描かれているということになろう。もちろん、そうした知識は、能や歌舞伎など芸能における変形や虚構を多分に反映しているものといえる。

また、狂歌が描く蟹の諸要素から、そのモデルとなったかも知れない蟹について随所でその比定を試みてきた。泡吹きという特徴からは、アカテガニかベンケイガニが想起され、赤色で石垣の穴に棲むというのも、その補強証拠となろう。また飯炊きのイメージは、それが炊飯時の泡吹きに基づくものとするならば、アカテガニやベンケイガニが繰り返し有力候補となろう。米搗きや砂団子（握り飯）に注目するならば、コムツキガニやチゴガニなどのスナガニ科の蟹が候補となる。さらに、「目を空ぎまに」という姿も、眼柄の長いスナガニ科の蟹の特徴に合致し、オサガニやヤマトオサガニも有力候補に加わることになろう。この2種の甲羅にもヘイケガニほどではないが、立派な人面模様を読み取ることができる。

また、食用という要素に注目するならば、当然ガザミをはじめワタリガニの仲間が最有力候補となる。加熱後は見事に赤くなるので、色彩の面でも候補の資格十分であろう。前稿でも触れたようにガザミをヘイケガニと呼ぶ地方もあるのである〔本尾 1974：11〕。

竜閑斎による挿絵の蟹のモデルについて考えてみよう。色彩に関しては、アカテガニとベンケイガニのそれに近いといえる。また、波打ち際の岩場という配置の面では、放卵時のアカテガニやベンケイガニのそれと一致する。しかし、前側縁最後部の歯が側方に突出しており、ワタリガニ科やキンセンガニ科の蟹の面影も認められるものの、遊泳脚はない。挿絵の平家蟹は、ヘイケガニ科の蟹、ベンケイガニ科、ワタリガニ科あるいはキンセンガニ科の蟹とのキメラ（Chimera）というべきであろうか。そして、一連の狂歌にもまた同様なことがいえるのであった。

ごく一部の歌、例えば21「石垣の穴にこまれる平家蟹 浪の寄せ手に泡や吹くらん」などはアカテガニやベンケイガニをモデルにしているであろうという特定が可能だが、

さまざまな特徴を説く45首全体を見渡すと、公約数は見だしがたく、特定種への比定はまったく困難となる。その上での作画となると、「あちらが立てばこちらが立たぬ」ことになり、絵師竜閑齋はさぞや苦心したことであろう。3尾の「平家蟹」が這う波打ち際の砂浜には磯岩も配置され、そこに1尾が身を寄せている。それは、あちらもこちらでも立てようという配慮の結果であるかも知れない。なお、人面模様について明記した歌はわずか1首であったが、竜閑齋がこの挿絵の最大の特徴として人面を描いていることから、平家蟹の甲に人面というのは、当時の狂歌師たちの共通認識であったものと考えられる。甲に人面という点でも、上述のように多種類の蟹がモデルとして想定できた。ヘイケガニはもちろん、アカテガニ、ベンケイガニ、アシハラガニ、オサガニ、ワタリガニ等々、多くの蟹の甲に人面模様を認めることができる。酒井氏も「へいけがに以外の種族でも甲らの刻印が見ようによっては人面に見える種族はたくさんある」と指摘している[酒井 1980:79]。もちろん、ハックスレイによる「人為淘汰による動物の擬態」説は否定されているが、ヒトが蟹の甲に人面を読み取ってしまいがちなことは決して否定できない。ヒトには『丸いものがふたつあると、それが目に見えてしまう』といったような、ある種のパターンに顔を見出す特殊な認知機能の存在が考えられる」という[山口・柿木編 2013: ii]。生理学や心理学の領域で研究の進む「顔認知」のメカニズムである。

こうした生理的・心理的条件の上に、われわれは複数種の蟹の甲に人面を見だし、そこに故事を結びつけ、さらに伝聞と想像を繰り返しながら、多様な「平家蟹」像を展開してきたのだといえよう。

以上、本稿では、狂歌という特殊なジャンルを対象としてきたが、想像や誇張そして誤謬は、地誌や紀行文にも認められようし、さらには本草書や国語辞典にも皆無とはいえないであろうことに留意すべきであろう。

謝辞

本稿執筆に際しては、下関市立しものせき水族館魚類展示課長の土井啓行学芸員、また愛知学院大学文学部の神山重彦氏（日本文学）にそれぞれのご専門の立場から多数のご助言・ご教示をいただいた。深く感謝申し上げたい。

注

- 1) 伊海孝充氏は「碇潜」「船弁慶」においてなぜ知盛が長刀を持つに至ったのかについて論じている[伊海 2008]。
- 2) 清盛は死後、平家蟹ではなく、竜に化したという理解もあった。梶原正昭氏の著書で知るところとなったが、『愚管抄』は元暦2年7月の大地震を「清盛が竜になって引き起こしたものとし、〈竜王動〉と人びとが呼んだことを伝えているという[梶原 1998:39]。屋島や

『狂歌百物語』に見る平家蟹：蟹に化した人間たち（3）（蛸 島）

壇ノ浦の海底を描く錦絵には、安徳帝や二位尼、知盛を守るかのような竜の姿がしばしば描かれる。そこには清盛の化身という意識が込められているのかも知れない。

- 3) 湯西川の民話を語る会の阿部文子氏、平家狩人村の中山圭氏らから2014年6月、筆者聞き取り。
- 4) 「口」が人間以外の口を意味しているという可能性も無くはない。ではヘイケガニを捕食する生物は何であろう。このことを、しものせき水族館の土井啓行氏にお尋ねしたところ「魚の胃内容物調査の文献などでヘイケガニの記述はみたことがなく、推察だが、同所的に生息する、エイ類（アカエイ・トビエイ）、エソ類、異体類（ヒラメ・カレイ）、フグ類（トラフグなど）が考えられる。同じカニ類でもヘイケガニより大型のガザミ、イシガニなども捕食者になりえると思われる」とのご教示をいただいた。
- 5) 小泉一雄氏は、この歌の「汐干」に関して「冥土の事を潮干山と申す言葉」があることを指摘している [小泉一雄 2002 (1934) : 22]。

引用文献

- (※前稿および前々稿の引用文献に挙げたものは割愛した)
- 秋里籬島・原田 幹 校訂 1975 『撰津名所図会』上巻 古典籍刊行会
- 天野勲 2002 『黒潮と知多半島沿岸のカニ』 半田市立博物館
- 伊海孝充 2008 「長刀を持つ知盛の成立—〈碇潜〉〈船弁慶〉をめぐる試論」『能楽研究』 法政大学能楽研究所 pp. 1-23
- 小田英智・桜井淳史 1996 『カニ観察事典』 偕成社
- 角川日本地名大辞典編纂委員会・竹内理三編 1983 『角川日本地名大辞典28 兵庫県』 角川書店
- 京極夏彦・多田克己著・須永朝彦校訂 2008 『妖怪画本・狂歌百物語』 国書刊行会
- 小泉一雄編 2002 (1934) 『復刻版 小泉八雲秘稿畫本 妖魔詩話』 博文館新社
- 小泉八雲 平井呈一訳 1964 「天の川綺譚」『全訳 小泉八雲作品集』第十巻 恒文社 pp. 351-490
- 神戸市立博物館編 1997 『源平物語絵セレクション』 神戸市スポーツ教育公社
- 小松茂美 1990 『法然上人絵伝』中 中央公論社
- 滝沢馬琴・日本随筆大成編集部編 1930 『耽奇漫録』 吉川弘文館
- 多田克己 2008 「『妖怪画本・狂歌百物語』の妖怪総覧」京極夏彦・多田克己著・須永朝彦校訂 2008 『妖怪画本・狂歌百物語』 国書刊行会 pp. 271-311
- 富倉徳次郎 1967b 『平家物語全注釈』中巻 角川書店
1967c 『平家物語全注釈』下巻 角川書店
- 松原弘宣 1982 「室津」 国史大辞典編集委員会編 『国史大辞典』 吉川弘文館 pp. 696-697
- 三浦知之 2008 『干潟の生きもの図鑑』 南方新社
- 三善貞司編著 2008 『大阪伝承地誌集成』 清文堂出版
- 村岡健作・小田原利光 1995 『カラー図鑑 カニ百科』 成美堂出版
- 山口真美・柿木隆介 2013 『顔を科学する：適応と障害の脳科学』 東京大学出版会
- 吉田幸一編 1999a 『狂歌百物語』上 古典文庫
1999b 『狂歌百物語』下 古典文庫

